

その表現、斬新につき？ Can we say, “That expression is great” ?

OS11：前衛表現の理論・実装・認知

【略称：前衛と知】

--企画にあたって--

<オーガナイザ> 小川 有希子

<Organizer> Yukiko OGAWA

法政大学社会学部

HOSEI University

yukiko_ogawa@jazz.odn.ne.jp

1. 「表現」が広げる波紋

「表現」という言葉は、現代一殊に 21 世紀において、実に厄介な響きを放っている。目覚ましい技術革新により、良い意味でも悪い意味でも想像を超えるアートが素人にも作れてしまったりするので、我々はちょっとやそっとのものには笑いも泣きも驚きもしない、言わば一億総不感症のような時代に突入しているのである。ここであえて揶揄的に「アート」と言ってみた。「表現ですから...」「アート(芸術)ですから...」。この言葉を免罪符にして、昨今では犯罪かと思しきアートまで登場する始末である。自らの女性器の 3D プリント用造形データを配布して逮捕され、これはアートであり表現の自由の侵害だと訴えた芸術家のニュースが報道された際、『新情報 7days ニュースキャスター』で北野武は、「それを認めてしまったら、裸で外歩いてもいいってことになっちゃう」とコメントしていた。また『アウト×デラックス』で、奇行とも思える方法で絵を描くパフォーマンスを披露した芸術家が「表現」という言葉を口にした際、アウト軍団の某俳優が、「申し訳ないけど、『表現』っていうの、あんまり好きじゃないんだよ。何でもかんでも『アート』で誤魔化されるの、大嫌いなんだ」と憤激していたことも思い出す。

これらのエピソードは、表現ないしアートというものの数居が低くなり、一人一人が尊重されるべき表現者だ、つまり一億総不感症の裏には一億総芸術家と目される状況があり、価値判断の基準が不明瞭になっているという、現代特有の問題を露呈する。しかし事はそれだけでは済まない。この問題にはもう一方の極があることを、合わせて認識する必要がある。すなわち、高度な技術に裏打ちされ、確固たる評価を物にした真にプロフェッショナルな表現者

たちが、「出来るものならやってみろ」という思いを燃やしながら商業的な成功も賭けて鎬を削る、もう一方の状況があるということだ。この戦いには誰もが参加できるわけではない。明らかに素人には出来ないレベルの表現がそこにある。真の芸(術)は、一方で「アート」が大衆化してきた風潮を横目に、反比例するかのように素人の追随を許さない高みへ舞い昇っていく。「自己表現？笑わせるな。ルールの中で勝負しろ」...そんな声が聞えてくるかのようなのだ。

2. 「前衛」という言葉に込めた思い

本セッションの名称を決める際、私は華々しく舞台に立つ俳優や音楽家、満を持して発表される文学や絵画や映像作品の光の部分よりもむしろ、自身の表現を掴み取るのにもがき苦しむあらゆるジャンルの表現者たちの陰の部分进行想像した。厳しい状況の中で日々孤独に戦う表現者たちがいる。不断の思考と鍛錬の行き着く先に、洗練された極上の表現が生み出される。それが時間を経ても淘汰されない異彩を放ち、それを讀んだり、見たり、聴いたりした我々が、胸に迫る興味や血湧き肉躍るような興奮を覚えるとしたら、その表現はあらゆる意味で、斬新だと評して良いと思う。私はそれを、前衛表現と呼ぶ。

本セッションの CFP 執筆と共に考案した 10 個のキーワードに対して、共同オーガナイザである小方孝氏から「芸能」というキーワードを追加したいという提案があった。「芸術」という言葉が無条件的に何某かの価値を付与してしまう構造的な問題を危惧する小方氏と私も同感覚である。芸術か芸能かの線引きが重要なのではない。我々は知を科学する研究者として、「人を魅了し豊かにする芸とは何か？」を考えるべきである。2015 年夏、千葉大学で語らう。